

# 日本宗教学会 第74回学術大会

## パネル発表要旨集

### 日時・会場

2015年9月4日(金)－6日(日) パネル発表は5日(土)と6日(日)

創価大学 中央教育棟 (西 AW 東 AE 中央 AC)

### 開催パネル一覧

| 日    | 部会 | 教室    | パネル題目                       | 代表者   |
|------|----|-------|-----------------------------|-------|
| 5日午前 | 2  | AW403 | 近代日本における公共宗教と宗教の公的役割        | 星野 靖二 |
| 5日午後 | 1  | AW404 | 〈考える「倫理」〉の授業における宗教学の役割      | 藤原 聖子 |
|      | 2  | AW403 | 近代アジアの世俗主義と国家—ポスト世俗化論に向けて—  | 山中 弘  |
|      | 4  | AW401 | 観る・坐る・祈る—「身体」をめぐる思想と宗教文化—   | 何 燕生  |
|      | 8  | AE352 | 日蓮研究の現状と課題                  | 小林 正博 |
|      | 9  | AE353 | 震災と記憶—声にならない声を聴く—           | 高橋 原  |
|      | 12 | AC531 | 漢字文化圏における聖書翻訳と信仰の表現         | 長澤 志穂 |
| 6日午前 | 11 | AE555 | S G I の欧米における受容とその発展        | 秋庭 裕  |
| 6日午後 | 3  | AW402 | 戦場のワイトゲンシュタイン—神への祈り—        | 松野 智章 |
|      | 4  | AW401 | 宗教・ヒューマニズム・医療—臨床と教育における架橋—  | 安藤 泰至 |
|      | 7  | AE351 | 新発見大須文庫資料による日本中世禅宗史の転換      | 末木文美士 |
|      | 8  | AE352 | 東アジア仏教と『法華経』                | 菅野 博史 |
|      | 10 | AW507 | 東洋の宗教思想と井筒俊彦の哲学的思惟          | 鎌田 繁  |
|      | 11 | AE555 | 新宗教論の再検討—後期近代社会における展開を踏まえて— | 大西 克明 |
|      | 12 | AC531 | 高楠順次郎とその時代—新出資料の紹介を中心に—     | 石上 和敬 |
|      | 13 | AC532 | 東と西における神—靈魂論と最高存在論—         | 安藤 礼二 |
|      | 14 | AC533 | アジアにおける聖者信仰の諸相              | 井田 克征 |

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

## 近代日本における公共宗教と宗教の公的役割

※ 開催校特別企画 英語パネル

代表者：星野 靖二

広義の公共宗教の理解のために—とくに「深層文化」との関連で— 津城 寛文 (筑波大)  
宗教の「公」への関わり—近代日本における回路の歴史的検討— 星野 靖二 (國學院大)  
宗教の社会貢献を問い直す—ホームレス支援の現場から— 白波瀬達也 (関西学院大)  
近現代日本における公共宗教と宗教教団の社会的役割 島蘭 進 (上智大)

コメンテータ：ホセ・カサノヴァ (ジョージタウン大)

司会：星野 靖二 (國學院大)

1960年代以降の宗教社会学において、宗教は衰退しているのかどうかというテーマが、「世俗化」をキーワードにさまざまに論じられた。そのうち、「市民宗教」「見えない宗教」「聖なる天蓋」などは、宗教が衰退しているように見えつつ、別の次元で機能しているという、複眼的な見方の提案であった。1980年代以降、各地の伝統的諸宗教が再活性化し、公的領域で機能する現象が各地で観察され、ホットな研究テーマとなった。その中において、この現象を「公共宗教」の復興ととらえ、クリアな見通しを開いて高い評価を得たのがJ・カサノヴァ(1994)である。日本の宗教学としては、一神教世界に軸足を置く欧米の理論を引き受けた上で、そこで射程に収められていない日本(アジア)を見るとどうなるかという課題を引き受け、よりユニバーサルな視野を開くことが、周辺地域ならではの貢献として期待される。このパネルでは、そのような試みの一端を、それぞれの視点から示したい。

津城寛文

カサノヴァ『近代世界の公共宗教』が開いたクリアな見通しを受け、その「巨人の肩」に乗ることで、中心的・枢軸的なものから周縁的・拡散的なものまで、公共宗教の多様な表現を網羅的に整理することを試みたい。周辺理解を重視し、広義の公共宗教を考えるのは、それによって、中心部の配置がより際立ち、枢軸的な現象、狭義の公共宗教の理解が深まると思うからである。「深層文化としての宗教」(井門)はそのための戦略的な焦点となる。「深層文化」という日本オリジナルのキーワードを組み込むことで、コンフェッショナルな政教関係に偏った公共宗教論は、無意識的な民俗信仰や神話の思惟といった扱い難い領域を扱う端緒を手にするだろう。

星野靖二

近代日本における宗教の「公」への関わりに焦点を合わせ、宗教は私的なものであるべきという理解が組み上げられていく一方で、どのような回路において宗教が「公」に関わってきたのかについて検討する。例えば、プロテ

スタント・キリスト教は私事化の理念と親和的な「ビリーフ的」宗教の範型とされるが、キリスト教知識人がより広く「公」に関わる問題について論じることは、戦前・戦後を問わず行われてきた。これは一つの回路であるが、そこでは端的にはキリスト教と日本の近代化を結びつける議論のように、宗教的価値を世俗的価値に翻訳する営みがなされてきた。こうした営みの持つ意義と問題、また可能性について考察する。

白波瀬達也

近年、社会福祉の分権化・民営化のなかで、また税制優遇されている宗教法人に対する公益性が問われるなかで宗教的動機に基づく支援活動が顕在化している。宗教学および宗教社会学ではこうした動向を「宗教の社会貢献」という研究視角で取り扱うことがトレンドになっている。しかし、その含意は未だ研究者間で十分共有されているとは言い難い。本発表ではホームレス支援の調査から得た知見を基に、二方向から「宗教の社会貢献」という研究視角を再考する。ひとつは「宗教」という概念の不明瞭さを指摘し、組織形態に着目したFROという視座の有効性を論じる。もうひとつは「社会貢献」概念で捉えられる対象が限定的であることを指摘する。

島蘭進

近代日本における宗教史を考えると、国家神道を除外することはできない。戦前は公的な領域での国家神道の優位の下で、宗教教団はそれに従属する形で公的領域に参与する他なかった。これに対して、戦後は日本国憲法により明確な政教分離の規定により、信教の自由の保障が一段と強まったのは確かである。しかし、象徴天皇制の下でも皇室神道は持続され、国家神道を復興させようとする勢力は影響力を強めている。これに対し、仏教や新宗教などの宗教教団は、平和へのコミットメントを表出し、靖国神社の公的機能の制限を求めるなどして、公共宗教としての機能を強めている。現代日本では、国家神道対公共宗教という対抗軸が潜在している。

## 〈考える「倫理」〉の授業における宗教学の役割

※ 日本学術会議後援、日本宗教研究諸学会連合・日本哲学系諸学会連合共催による  
日本哲学会・日本倫理学会との合同企画

代表者：藤原 聖子

サンデルが宗教の授業をするとどうなるか—英国宗教科の新展開— 藤原 聖子 (東大)  
オランダの宗教教育における仏教とイスラームの表象 ヨーン・ボルプ (オーフス大)  
私たちは誰を愛するのか—生命倫理におけるキリスト教的視点— 土井 健司 (関西学院大)

コメンテータ：林田 康順 (大正大)

コメンテータ：小田 淑子 (関西大)

司会：藤原 聖子 (東大)

本パネルは、日本学術会議後援、日本宗教研究諸学会連合・哲学系諸学会連合共催による、日本哲学会・倫理学会との合同企画である。

2015年前半に、日本学術会議・哲学委員会から、提言「未来を見すえた高校公民科倫理教育の創生—〈考える「倫理」〉の実現に向けて—」が発表される予定である。これは、中等教育でマージナライズされる一方の「倫理」の今日的重要性を訴えるものである。2020年からの大学入試改革を先取りし、暗記中心の学習から主体的に「考える」学習へと倫理教育の内容を転換することで、あらゆる生徒に不可欠な基礎力を効果的に育成できるとしている。

現政権下で、中学校までの「道徳」の教科化が決定され、また、「公共」という名称の高校新科目の導入が検討されているが、それが特定の価値の強制にならないように、十分注意をしなければならない。今回の「提言」は、そのような政策から一線を画し、生徒の自主性を守りながら無規範ではない社会を構築するための教育の方策を積極的に提案している。

他方、高等教育に関しても、学術会議内で、「質保証」のための分野別参照基準についての議論が進められ、宗教学、インド学仏教学、中国思想、日本思想などを含む「哲学」の参照基準の原案が完成するのも2015年である。この参照基準では、「市民性の涵養」が諸分野に共通する大項目になっており、大学教育が、知識の伝達や思考力の育成だけでなく、民主主義社会を支える共通の価値基盤の形成にも関わることが前提とされている。つまり、中等教育でも高等教育でも、「考える倫理」をコンセプトとする教育の具体化が、課題として急速に共有されつつある。

これらの動向を受けて、宗教学は、「考える倫理」教育にどのような役割を果たせるのかを議論し、具体的な方策を提案するのが、本パネルが目指すところである。教育学では、上記のような、思考力と規範の構築を両立さ

せる公民教育を、従来の公民教育・道徳教育から一線を画すために、「市民性教育」と呼ぶことが多い。宗教学でもこの概念は、「宗教的情操教育」と本パネルの試みを区別するために役立つ。実際に、市民性教育の発想により、宗教教育を公立校で実施している例も海外には存在する。すなわち、生命倫理、環境倫理、異文化共生、戦争と平和、貧困、人権、動物の権利、宗教と科学などの諸問題を考える上で、諸宗教の見解を参照しながら、討議民主主義の予行練習をするような試みである。日本で現在、「いのちの教育」「宗教文化教育」等々と分断されている宗教学関連諸教育を有機的に結びつけ、単なる功利や規範主義に陥らぬよう反省的思考の育成をより強化したものとと言えるかもしれない。学術会議の「提言」とそういった先行する実践例を踏まえ、日本の状況に合った「考える倫理」教育を宗教学として構想したい。

3人の発表者はそれぞれ、イギリス、デンマーク、日本での、上記の理念に沿う教育の理論と実践例を紹介し、参加者と共有可能な課題・問題を提示する。第一発表者の藤原は、イギリスの教育が市民性教育化＝コミュニタリアン化することにより宗教の扱いはどのように変わったかを紹介し、その功罪を分析する。第二発表者のボルプ氏は、日本の仏教を専門とし、デンマークの中等教育用宗教教科書を執筆している。ムハンマド風刺画事件後のデンマークの教科書が、イスラームや仏教をどう描いているかに焦点を当てる。第三発表者の土井氏は、生命倫理問題のなかでもとりわけ移植医療において、宗教的な「愛」の概念は容易に臓器提供に結びつけられやすいが、そこでステレオタイプ化して決めてしまうのではなく、この場合に「愛」とは何かを考える必要性とその可能性を考察する。コメンテータは、教科書における法然—親鸞の記述についてパブリックに問題を提起している林田康順氏と、イスラームを専門とし、哲学教育にも知識教育にも造詣の深い小田淑子氏である。

## 近代アジアの世俗主義と国家—ポスト世俗化論に向けて—

※ 開催校特別企画 英語パネル

代表者：山中 弘

日本の宗教社会学における世俗化論

山中 弘 (筑波大)

世俗化ではなくライシティゼーション—近代日本の信教の自由—

林 淳 (愛知学院大)

タイのモダニティと仏教の役割

櫻井 義秀 (北大)

近現代インドにみる「世俗国家」の姿—仏教改宗運動の事例から—

舟橋 健太 (龍大)

コメンテータ：ジェイムズ・ベックフォード (ウォーリック大)

司会：山中 弘 (筑波大)

1960年代の西欧の宗教社会学の支配的な理論であった世俗化論論争の迷走の中で、宗教社会学の理論的パラダイムの不在が意識されて久しい。世俗化論の代替理論としてアメリカの宗教社会学者たちが提唱した「合理的選択理論」も、それほど支持の広がりを見せることはなかった。今日でも、世俗化論争は続いているが、全体としてヨーロッパとアメリカという地域的争いという様相を呈しており、こうした状況の中で、欧米の学界内部からも、理論内部に埋め込まれた西欧的近代化や宗教＝キリスト教といった前提から離れるべきだという主張が現れてきている。こうした欧米の学問状況を鑑みるに、西欧に偏らない宗教社会学の新たな理論的パラダイムの構築に向けて、非西欧世界を研究のフィールドとする日本の研究者の果たすべき役割は非常に大きいように思われる。というのも、日本の宗教社会学の展開は欧米の理論を積極的に摂取しながらも、日本独自のイエ・同族団、先祖祭祀、新宗教などの優れた実証研究を積み上げてきており、新たな宗教社会学に向けて欧米の宗教社会学との間で創造的な対話を行う格好の位置を占めているからである。そこで、本パネルは、ヨーロッパの宗教社会学を長い間牽引してきた J・ベックフォード名誉教授をコメンテータに迎えて、世俗化論を共通の対話の土俵としながら、宗教史、宗教社会学、人類学の視点からそれぞれ日本、タイ、インドを研究してきた林、櫻井、舟橋各氏に、世俗化論を念頭におきながら、欧米と違って外発的な近代化の道を歩んだ3国における宗教の位置や役割について話題を提供していただき、ベックフォード氏との間で活発な議論を行うことを目的としている。もちろん、日本では世俗化論はそれほど流行したわけではなく、体系的な一般理論としての世俗化論の破綻は明らかではあるが、近代社会における宗教の動態や位置をめぐる議論にとって、世俗化論は依然として基本的な理論的な参照枠を提供していると考えている。このかつての有力な理

論的パラダイムを介して、アジアの視点から欧米の宗教社会学との理論的な対話を試みることに本パネルの最大の意義があると確信している。

上述の意図のもとに、本パネルは以下の4つの発表から構成されている。まず、山中が日本の宗教社会学における世俗化論との受容と批判を時系列的に整理しながら、そこに看取される特質と課題を明らかにし、ベックフォード氏との対話の前提を整える。次いで、林が宗教史の立場から、日本の近代国家権力の形成における反宗教的、世俗的性格を指摘し、自由・平等・博愛を共和国の理念としたフランス共和国と比較して、国家統合のイデオロギーとして天皇の権威を利用し、天皇という新たな崇拜対象を国民に強制したことを論じ、近代社会と宗教の関係よりも、近代国家と宗教の関係を問うべきことを主張する。櫻井は、宗教社会学の立場から、タイを事例にしてモダニティと宗教の世俗化は地域ごとにユニークで複合的であることを示す。タイは日本同様に近代国家の形成を国民の創造、中央集権体制の構築、宗教政策による近代仏教の創出からはじめ、1960年代のサリット軍事体制以降に「民族・仏教・王権」を中核とした開発主義を進めてきた。中進国となったタイにおいて上座仏教は公定宗教から文化宗教に変わりつつある。上座仏教の社会的役割を複数の宗教的トピックから説明し、タイ独特の政教関係を描出する。最後に、舟橋は人類学的視点から、インドの仏教改宗運動の事例を通じて、社会と宗教の関係のありようを考察し、世俗化論の再考を試みる。インドは世俗国家をその憲法前文に謳っているにもかかわらず、イギリスの植民地統治を経た、同国の宗教と政治、社会の関わりは、近代西欧社会にいう「世俗国家」とは異なる様相を呈していることが明らかにされる。

なお、本パネルは開催校企画であり、すべて英語で行われる予定である。

## 観る・坐る・祈る—「身体」をめぐる思想と宗教文化—

代表者：何 燕生  
 呉 根友（武漢大）  
 秦 平（武漢大）  
 栗田 英彦（日本学術振興会）  
 何 燕生（郡山女子大）  
 木村 敏明（東北大）  
 司会：木村 敏明（東北大）

道家・道教の身体論—「坐忘」について—  
 身体感覚を超えて—老子の「恍惚」という思想—  
 国民文化と坐—岡田式静坐法にみる「自己」のありかた—  
 現代中国における「少林寺」現象—禅の脱文脈化をめぐる—  
 カトリック信仰と伝統武術—インドネシア、THS/Mの事例から—

山林での釈迦の「苦行」や十字架でのイエスの「受難」を指摘するまでもなく、宗教の出発点は「身体」の問題にあったと言える。また一方、「不老長寿」「即身成仏」「断食」「坐禅」「冥想」などの概念のように、東アジア思想の特徴の一つに、「身体論」があったと指摘できよう。しかし、いずれにおいても、「観る」「坐る」「祈る」という身体的行為が取り入れられることは多く、しかもそこには新たな思想の創出、宗教の脱文脈化、あるいは文化のナショナリティがしばしば確認されるのである。

「身体」をめぐる言説とその宗教文化の多様性を考える研究がこれまで多くなされてきたが、本パネルは特に老荘思想、仏教、キリスト教、国民道徳教育といった領域に焦点を当て、それぞれ中国、インドネシアおよび日本の立場から国際的・学際的に考察することを課題とするものである。このような取り組みにより、「身体」をめぐる問題が個別的にではなく、より多角的に解明されることを目指したい。具体的には以下のような諸課題が議論されることになる。

**1. 呉根友「道家・道教の身体論—「坐忘」について」**では『莊子』における「坐忘」という概念を取り上げ、「端座して忘れる」と解釈された唐代の成玄英の説を批判的に検討し、「坐る」という身体的行為は単に思想レベルの問題ではなく、同時に宗教的文脈を持つ身体行為であると指摘できるとし、それは「故無きの忘」「自然のままの忘」だからだと考える。つまり「坐忘」とは道教が言う「道を得る」という境地だという。

**2. 秦平「身体感覚を超えて—老子の「恍惚」という思想」**は、「恍惚」という老子哲学の重要概念を取り上げ、「恍惚」における両義性——人々の前に呈示されている「道」のあり方とそれを借りて「道」を体験する方法と指針——について検討する。つまり、前者について言えば、それは「道」の日常的な感覚経験や捉えがたい絶対的、一個独立の側面を現している。後者について言えば、

それは人間が「道」と共鳴し、出会う契機である。そこでは「恍惚」が外在的な感覚的欲望の障りを排斥し、有無への囚われを放下するという精神的な静まりを意味するものである。したがって、そのような捉え方から、それは道家の言う「修煉」と相通じるところがあり、単に感覚レベルを超えた一種の宗教思想であると言える。

**3. 栗田英彦「国民文化と坐—岡田式静坐法にみる〈自己〉のありかた」**は岡田式静坐法の創始者・岡田虎二郎（1872～1920）とその後継者の一人・佐藤通次（1901～1990）の静坐論と国民文化論を取り上げる。従来、岡田には「個人主義者」、佐藤には「右翼」といったレッテルが張られてきたが、両者の比較を通じて、そこに共通する近代的前提を指摘する。他方、岡田式静坐法の実際の活動における多様性と国際性に焦点を当て、必ずしも両者の理想に回収されない身体技法の可能性を考察する。

**4. 何燕生「現代中国における『少林寺』現象—禅の脱文脈化をめぐる—」**は、少林寺という禅寺をめぐる現代中国の言説空間（主にマスメディア）から「少林寺」という現象を紹介し、禅と武術の結合、禅の脱文脈化などについて考察する。中では少林寺拳法に取り入れられている「観る」「坐る」「祈る」についても議論される予定である。

**5. 木村敏明「カトリック信仰と伝統武術—インドネシア、THS/Mの事例から」**は、1980年代にインドネシア、ジョグジャカルタのカトリック教会で始まり全国へと広がった伝統武術学修運動トゥンガル・ハティ・セミナリ／マリア運動をとりあげる。この運動は、伝統武術ブンチャット・シラットの多様な動作にカトリック的意味を読み込み信仰の表現としてそれを学修することを目的としたものである。本発表ではこの運動の経過と概要を提示した後、その意義を、教義と身体技法のダイナミズムという観点から分析する。

## 日蓮研究の現状と課題

代表者：小林 正博

日蓮文書のデジタル化—日蓮諸教団共有の聖典づくりのために— 小林 正博 (東洋哲学研究所)  
日蓮の「三大秘法」思想について 前川 健一 (東洋哲学研究所)  
日蓮正宗教学の特質—正信会と創価学会の新教学創作の試み— 花野 充道 (法華仏教研究会)  
学問的研究と教団の教義—創価学会の場合— 宮田 幸一 (創価大)

司会：前川 健一 (東洋哲学研究所)

現存する日蓮自筆の遺文は約2700紙(含断簡)、本尊は約130幅にも及んでいる。鎌倉時代の歴史上の人物の中で、これほど大量の自筆文書が今に伝わっているのはまさに驚異的といえよう。文学的な第一次資料が豊富であることは特筆すべきことであるが、同時に第二次資料も大量に伝存している。これらの遺文・本尊をどう位置づけるかで、教義解釈論議は多様化、複雑化し、特に近年、日蓮諸教団の間での激しい論争さえ惹起するに至っている。

本パネルでは、日蓮遺文の文献学的研究と日蓮の教義の骨格の一つとされる「三大秘法」(本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目)の中の本尊論や戒壇論について言及していく。そして解釈論や論争の内容を紹介しつつ、今後の日蓮研究のあるべき姿を提示していきたい。4人のパネラーは、以下の発表題目と要旨に沿って、「日蓮研究の現状と課題」を論じていく。

【小林正博】日蓮文書のデジタル化—日蓮諸教団共有の聖典づくりのために

発表者は昨年末に『日蓮の真筆文書をよむ』(第三文明社)を刊行し、創価学会版の『日蓮大聖人御書全集』未収録の真蹟存の遺文を中心に解説を試み、合わせて『昭和定本日蓮聖人遺文』(立正大学教学研究所編)の誤読を多く指摘した。その作業の中で、さらに真蹟が現存しない遺文の文章ももう一度本格的に見直す必要があると痛感した。そのためには日蓮の直・孫弟子写本と日朝本・平賀本など、古写本画像のデジタル化が強く望まれる。教団の枠を越えて日蓮研究者がこの画像データを活用し、共同研究することで日蓮諸教団共有の聖典づくりも視野に入ろう。

【前川健一】日蓮の「三大秘法」思想について

日蓮が晩年にと考えた、いわゆる「三大秘法」(本門の本尊・戒壇・題目)は、特にその中に含まれる「本門戒壇」の扱いをめぐって、日蓮系諸教団の中で大きな問題

になってきた。しかし、日蓮が「三大秘法」に相当するものに言及した箇所は必ずしも多くなく、しかも時期的にはかなり限定されている。果たして、「三大秘法」が日蓮の根本思想の一つであるのか、と問うことも意味のないこととは言えない。本発表では、「三大秘法」にかかわる遺文について改めて検討し、日蓮の意図を検討したい。

【花野充道】日蓮正宗教学の特質—正信会と創価学会の新教学創作の試み

近年、日蓮正宗から正信会と創価学会が分裂するに至った。正信会はさらに宗教法人派と任意団体派に分裂して教義論争が続いている。他の日蓮諸教団に対する日蓮正宗教学(日寛教学)の特質は、本門戒壇の大御本尊(富士大石寺所蔵のいわゆる板曼荼羅)以外の日蓮自筆本尊の宗教的権威を認めない点にある。日蓮正宗と正信会の教義論争、正信会内部の教義論争を紹介し、それらをふまえて今後、創価学会がどのような新教学を創作していくか、その現状と問題点を論じてみたい。

【宮田幸一】学問的研究と教団の教義—創価学会の場合

昨年創価学会は、会則の教義条項を変更した。創価学会は長年日蓮正宗の信徒団体として日蓮正宗の教義を信奉してきたが、日蓮正宗から分離した後、どのように独自の教義を形成していくのか不明であった。今回の改正では、戒壇本尊論が日蓮遺文の中では正当化できないという論法で、その議論を否定した。この論法は日蓮思想研究における学問的成果を受け入れた上で、教義形成を進めるという創価学会の方向性を示したといえる。この方向性にはさまざまな困難が伴うが、その困難のいくつかについて検討したい。

## 震災と記憶—声にならない声を聴く—

代表者：高橋 原

被災地における死者の記憶  
死者の記憶と向き合う人々と宗教者の対応について  
いわゆる「傾聴」という行為が形づくるもの  
記憶される死者の系譜—葬祭形態の過去と現在—

鈴木 岩弓 (東北大)

高橋 原 (東北大)

金沢 豊 (浄土真宗本願寺派総合研究所)

佐藤 弘夫 (東北大)

コメンテータ：磯前 順一 (国際日文研)

司会：高橋 原 (東北大)

### [企画の要約と意義]

東日本大震災以来、宗教者たちが多くの被災者の心に耳を傾けてきた。苦しみを抱えた他者の声に耳を傾けるとはどのような行為なのか、ここで一度総括をおこないたい。それは、被災者がこれから生きるうえで、どのように被災の記憶の保持とともに、吊り上げといわれるような忘却を進めていったらよいかを問い直すことでもある。これは東北の被災地だけでなく、近代の災害や戦争の記憶に向き合う上でも大きな示唆となるはずである。東日本大震災の経験を東北地方に特化させることなく、広く世界に対して開かれた経験として普遍化する試みとして本パネルを開催する。

### [個々の発表内容]

(鈴木岩弓) 本発表では、東日本大震災自体の解明を図る「災害を見る」研究(「ヲミル型研究」)ではなく、災害を日常世界では見えなかった問題が角度を変えて浮上してくる好機と捉えて「災害で見る」研究(「デミル型研究」)の立場に立ち、被災地から知り得た、死者に対する関わりの実態を手掛かりに、「死者の記憶」への対応について考えたい。今回の震災においては、<震災以前の死者との関係>と震災で生じた<被災死者との関係>が想定される。前者については 位牌・遺影・過去帳・墓・焼骨といった死者のシンボルの喪失に遭遇した人々の対応行動、後者については 供養・慰霊・追悼のために新たに創出されているさまざまな“死者と生者の接点”を手掛かりに、非日常的な災害に遭遇してのやむを得ずの対応策から、現代日本における「死者の記憶」のあり方が炙り出されると考えている。

(高橋原) 東日本大震災の被災地には「幽霊」が出ると言われ、その悩みに対応している宗教者がいる。本発表では、死者のイメージを介して自分の心と向きあいながら日々を暮らしていく一人一人の営みを、「宗教文化の器」の中で受け止め、支えていく役割を宗教者が果たしてい

ると考え、事例を交えながらその意義を検討する。

(佐藤弘夫) 死者の記憶が保持される期間は、地域と時代によって同じではなかった。地球上に存在するさまざまな社会には、ひとたび実在した人物の痕跡を自然な忘却のプロセスに委ねるものと、その摂理に背いてまでも永遠に記憶に留めようとするものという、異なったタイプの死の捉え方が看取される。日本列島では、通常の忘却の過程に抗って、一般の人々が死者を記録に残すための人為的な装置を作り出すようになるのは、近世といわれる時代のことだった。そこで形成された記憶装置が、近年大きな転換期を迎えているようにみえる。今回の発表では、災害による大量死の問題を視野に入れながら、この列島における死者を記憶するシステムの形成と変容、及びその歴史的背景と意義について考えてみたい。

(金沢豊) いわゆる傾聴活動を定期的に続けている。地元の方々と共に活動する中での顕著な事象を提示し、学際的に形づけが可能か否かを発題したい。「いわゆる」を付したのは、様々な職種で用いられ多義を含む「傾聴」という言葉の定義を一旦取り払うためだ。私たちの活動では、自らの気持ちは傍に置き、相手を中心にして気持ちを聴く。同じ方向を見てくれる人が存在するという事実を提供する。具体的には「気持ちを受け取ること」「そばに居続けること」の2点が、目の前の人の苦悩の和らぎに繋がる。それは単なる希望や医療的な回復ではない。しかし、自分の不安や、やり場のない気持ちを少しだけ開放させることが可能な他者が傍に存在することは、明日を生きることに繋がる。苦悩を抱えた方の声にならない思いや、活動の具体例を交えたセッションとしたい。

以上を踏まえ、東日本大震災の経験を特殊化せず、世界に対して開かれた経験として普遍化するという観点に立ち、さらにそれを宗教者と宗教学者、すなわち信仰と学問の関係をも再論する視点を、磯前順一のコメントにより提示する。

## 漢字文化圏における聖書翻訳と信仰の表現

代表者：長澤 志穂

中国人キリスト者の「訳語論争」への参加

金 香花 (京大)

高橋五郎訳『聖福音書』と明治のカトリック教会

日沖 直子 (南山宗教文化研究所)

日本正教会訳聖書における漢語—中井木菟麻呂の思想と信仰—

長澤 志穂 (南山宗教文化研究所)

朝鮮半島での聖書翻訳再考察—キリスト教受容者の立場を中心に—

洪 伊杓 (京大)

コメンテータ：岩野 祐介 (関西学院大)

司会：長澤 志穂 (南山宗教文化研究所)

中国、韓国、日本という漢字文化圏に属してきた国々において、伝統文化とキリスト教の葛藤・対話・融合が顕在化する場面の一つが、聖書翻訳作業である。外国人宣教師の役割に焦点を当てた先行研究は多いが、本パネルにおいては、現地文化が聖書翻訳に与えた影響や、聖書翻訳を通してみえてくる現地受容者の信仰とキリスト教理解に光をあてたい。本パネルを通じて、キリスト教が漢字文化圏に受容される時、どのような衝突や困難があったのか、また、受容者たちがそれをどのように克服していったのか、その一端を明らかにしたい。

金香花：中国人キリスト者の「訳語論争」への参加

19世紀プロテスタント宣教初期、聖書の中国語訳の中で起きた「訳語論争」は、1919年に「官話和合本」が「神」版と「上帝」版に同時に出版されるまで、半世紀間続いた。この論争は宣教師たちが主導していたが、1877年から1878年の間に『万国公報』で中国人キリスト者たちに呼びかけ、この論争への意見を集めていた。

中国人キリスト者と宣教師との間には、背景的な考え方に違いが見える。受容者側を重視することにより、この論争および聖書翻訳を考えるにあたり、違う側面から有用なヒントが得られるのではないと思われる。

日沖直子：高橋五郎訳『聖福音書』と明治のカトリック教会

1865年禁教下の日本で地下出版されたカトリック教理書『聖教要理問答』では、「天主」にデウスというルビがふられていた。その3年後に長崎でプチジャン神父が刊行した『聖教初学要理』(1868)では、「天帝」にデウスというルビがあり、また、天主と同じ、という註がつけられた。禁教撤廃後、プロテスタント聖書で採用された「神」という訳語がカトリック信者の間にも定着したが、それにあたってはヘボンの協力者であった高橋五郎訳『聖福音書』(1895-1897年)の役割を見逃すことはできない。発表では後に心靈主義に傾倒する高橋五郎の「神」

理解を考察し、明治の一般カトリック信徒向け刊行物を参照しながら「神」がカトリック教会に定着していく流れを追う。

長澤志穂：日本正教会訳聖書における漢語—中井木菟麻呂の思想と信仰—

日本正教会訳聖書はロシア人宣教師ニコライと中井木菟麻呂の共同作業によって作られ、中国古典に典拠をもつ漢語を多数使用している。木菟麻呂は大坂懐徳堂の学主を輩出した中井家の末裔でもあった。懐徳堂は徳川幕府公認の学問所であり、日本における漢学研究の一大拠点であった。

本発表においては、正教会訳のいくつかの語彙について、中国語訳や現代日本語訳と比較しつつ、漢語のもたらす意味の奥行きについて考察する。同時に、木菟麻呂に関連する資料を用いて彼の思想と信仰、とくに儒教観とキリスト教観に光をあて、それが翻訳における漢語選択に影響を与えた可能性について論ずる。

洪伊杓：朝鮮半島での聖書翻訳再考察—キリスト教受容者の立場を中心に—

朝鮮半島での聖書翻譯史には大きく二つの経路がある。(1)半島北部から満州でイギリス宣教師と接触した商人出身の改宗者たちの協力によって、瀋陽で最初のハングル聖書『耶蘇聖教路加福音全書』(1882)などが出版された。(2)日本に留学した李樹廷がヘボンら宣教師と接触した結果、漢文聖書に「吐」を付けた『縣吐漢韓新約聖書』(1884)とハングルの『馬可傳福音書譯解』(1884)などを横浜で出版した。現在まで朝鮮半島での聖書翻譯史は、宣教師の立場と論争などに焦点があてられてきたが、漢字文化圏での受容者の立場から再評価できる。特に、満州や半島北部で活動した翻訳者は庶民であった反面、日本で活動した李樹廷は両班(貴族)であったという相違点についても、その後の聖書翻譯過程との関連性を再考察する。

## S G I の欧米における受容とその発展

SGI-USA の 55 年―“Phase II” 再考―

ヨーロッパにおける SGI―リーダーシップと現地での受容―

世俗社会における SGI―イギリスを事例として―

創価学会運動と海外への展開―その理念と歴史の変遷の考察―

代表者：秋庭 裕

秋庭 裕 (大阪府立大)

川端 亮 (阪大)

稲場 圭信 (阪大)

中野 毅 (創価大)

司会：秋庭 裕 (大阪府立大)

創価学会は、SGI (Soka Gakkai International) として戦後早くから海外布教に注力してきた。最初に礎が置かれたのはアメリカ合衆国ですでに 55 年の歴史を刻んでいる。またヨーロッパにおいてもほとんど同時期に布教が開始された。今日 SGI は、世界 192 カ国・地域に広まり、1,200 万人以上の会員を擁し、海外においてはその信仰は現地の人々に広く受容されている。海外布教を行っている他の日本宗教の信者の多くが日本人・日系人であることと対照すると、これは SGI の顕著な特徴である。

本パネル「S G I の欧米における受容とその発展」は、ユダヤ＝キリスト教圏である欧米各国において、日本仏教に基づく創価学会の信仰が、なぜ世界の少なからぬ人々に受容されたのか、その歴史を欧米において振り返りながら分析し考察する。本パネルで取り上げる国々は、海外への広宣流布のさきがけとなったアメリカ合衆国の他、ヨーロッパで最も多くの会員を擁するイタリア、当初からヨーロッパ布教の拠点であったイギリスである。伊・英の両国は、かたや篤いキリスト教信仰＝カトリシズムを基盤とし、もう一方は国教会を戴くが世俗化の進捗が著しいという点も対照的である。

なお、本報告は、科学研究費補助金・基盤研究(B)「欧米多民族社会における日本型新宗教の受容と発展」(研究代表：秋庭裕)による成果の一部である。

第1報告(秋庭)は、アメリカが舞台である。布教開始から 15 年ほど経過した時期、SGI-USA は大きな転機を迎える。それが“Phase II”である。Phase II以降、組織に大きな混乱が生じ停滞と後退が目立った。それまでの順調な発展は頓挫したかのような様相を呈した。結局、教勢を回復するプロセスに復帰するのは 90 年代に入ってからであるのだが、SGI-USA の「あたかも失われた 20 年」を吟味することで、日本宗教が多文化多民族社会へ適応するための諸条件を考察する。

第2報告(川端)は、イギリスとイタリアの SGI を加

えアメリカの SGI と組織論的に比較する。ヒッピー文化の影響、日本文化の継承と現地の宗教・文化との摩擦などを取り上げ、アメリカとの共通性とイギリスとイタリアの独自性を指摘する。SGI の現地での受容にとって重要な要因として、イタリアの場合であればカトリシズムの基層信仰と日蓮仏法との交錯を、イギリスについては世俗化社会において宗教が再発見される契機を考察する。さらには、現地の理事長のリーダーシップの類型を考察し、その重要性について指摘する。

第3報告(稲場)は、イギリスを基調に、SGI-UK の先行研究である“A Time to Chant”の考察を踏まえ、その後のイギリス社会の変化と SGI-UK の発展の関連性を分析する。世俗化が進み、多文化主義に舵を切ったイギリスにおいて、新宗教の規模はアメリカや日本と比較して概して小さい。そのような宗教状況において、SGI-UK は新宗教運動として、半世紀以上の歴史の中で比較的成功的な NRM の事例である。その特質を考察する。

第4報告(中野)は、日本の創価学会運動と海外への展開の関連性、その展開過程における宗門との関係の影響などについて整理し、考察する。また自身が SGI 運動の学問的研究を初めて行った 1977 年～78 年の東京大学宗教学研究室によるハワイ日系人宗教調査、93～94 年のアメリカとメキシコの SGI 調査によって得た学問的知見と、上記3報告に見られる類似点と変化についてコメントする。

## 戦場のウィトゲンシュタイン—神への祈り—

代表者：松野 智章

第一次世界大戦における東部戦線—ブルシーロフ攻勢を中心に— 石神 郁馬  
ウィトゲンシュタインの『秘密の日記』—テキストとその内容— 丸山 空大 (東京工大)  
意味との合一、問いの消滅—『要約福音書』が語りかけたこと— 沖永 宜司 (帝京大)  
「宗教者ウィトゲンシュタイン」の原点としての『秘密の日記』 星川 啓慈 (大正大)  
司会：松野 智章 (東洋大)

【要旨】世界中で読まれているウィトゲンシュタインの『草稿 1914-1916』はノートの右側に書かれているが、そのノートの左側に並行して暗号で書かれたものが『秘密の日記』である。これは特異な出版経緯を経ているが、英訳も邦訳もなく、独語の原書も絶版である。この日記のなかには、神、霊、祈り、恐怖、安堵、戦闘の様相、生理現象、兵士たちとの関係など、彼の従軍中の私的な生活が赤裸々に書かれている。とりわけ、激戦のなかでの神への祈りは、「戦争と宗教」というテーマを考えるさいの1事例として、貴重である。

本パネルでは、最大の激戦であるブルシーロフ攻勢を中心に、文字通り、「生と死の境界」にたったウィトゲンシュタインの姿を浮き彫りにする。『秘密の日記』を知らずして、彼の人間性について語ることはできないだろう。以下、発表内容を紹介する。

### 【石神の発表要旨】

第一次世界大戦における東部戦線—ブルシーロフ攻勢を中心に—

ロシアの将軍ブルシーロフの主導により行われた「ブルシーロフ攻勢」(1916年6月)は、第一次世界大戦の主要な作戦の中でも激戦として知られており、150万人以上の死傷者が出たとされている。その規模だけでなく、大戦の勝敗に極めて大きな影響を与えたという点でも、戦史に名を留めている。この攻勢ないし激戦を体験する前後から、ウィトゲンシュタインの日記に内容的変化が見られること、つまり、宗教色が増すことは、よく知られている。この攻勢を中心に、彼が体験した数々の戦闘について紹介し、「どういう状況において彼が神に祈ったか」を考察する。

### 【丸山の発表要旨】

ウィトゲンシュタインの『秘密の日記』—テキストとその内容—

ウィトゲンシュタインの『秘密の日記』は、1980年代の半ばから、オーストリアの無名の教師ヴィルヘルム・パウムによって翻刻され、刊行された。この刊行は大きな衝撃とある種の混乱を学界に呼び起こした。本発表は、

このテキストがウィトゲンシュタインの遺稿管理者によって秘匿された後、パウムによって発見された経緯を概観する。そして、その内容を紹介した上で、一連の出来事において一体何が問題とされたのかを検討してゆく。最後にこれらの分析を踏まえ、このテキストがウィトゲンシュタイン研究に対してもつ意義の一端を明らかにしたい。

### 【沖永の発表要旨】

意味との合一、問いの消滅—『要約福音書』が語りかけたこと—

宗教哲学的観点から、『論考』における形而上学的問題の克服について、ウィトゲンシュタインが影響を受けたトルストイの『要約福音書』における「霊」との関係を中心に解明する。『論考』において形而上学的問題は、解答が与えられるのではなく、その問いを作り、それに答えようとする論理形式の方が誤っていると見なされた。それは哲学上の問題解決の方法であると同時に、ある決定的な生の肯定でもあった。これを、神に従ってあるという「霊」のあり方や、激戦地における極限的な経験がもたらした理由なき生の高揚とのつながりにおいて見直し、これらが形而上学的な問題解決にもたらした哲学的意義を究明する。

### 【星川の発表要旨】

「宗教者ウィトゲンシュタイン」の原点としての『秘密の日記』

「宗教者ウィトゲンシュタイン」自身の神や宗教についての考え方は、1993年に衝撃的な発見となった『哲学宗教日記』を始めとして、著書・論文・講義・会話・メモなど、多くの資料に散見する。しかしながら、ウィトゲンシュタインの戦歴の詳細を踏まえて『秘密の日記』を読めば、これまで脚光を浴びることのなかった彼の「戦闘体験」と「神への祈り」とがいかに密接な関係にあるかが、理解できる。本発表では、『秘密の日記』とそれ以降の資料との関係について論じ、「宗教者ウィトゲンシュタイン」の原点がこの日記にあることを示したい。

## 宗教・ヒューマニズム・医療—臨床と教育における架橋—

代表者：安藤 泰至

医学教育と人文学教育—医学者・秋元寿恵夫の生涯を手がかりに— 安藤 泰至 (鳥取大)

医学教育における宗教の立ち位置—科学論と人間観の視点から— 杉岡 良彦 (旭川医科大)

医療における宗教専門職の考え方—キリスト教チャプレンの視点— 柴田 実 (聖路加国際病院)

医療現場で「その人らしく」を支えるケア—仏教の立場から— 大河内大博 (上智大)

コメンテータ：加藤 眞三 (慶大)

司会：安藤 泰至 (鳥取大)

本学会では最近、宗教と精神医療や心理療法をめぐる問題、先端医療技術をめぐる生命倫理問題、死にゆく人々の看取りや悲嘆ケアをめぐる問題など、宗教と医療の両方に関わるテーマが取り上げられることが増えている。また、終末期患者へのスピリチュアルケアや、大災害などで大切な人を亡くした遺族へのグリーフケアをはじめ、実際に宗教者と医療専門職の協働が求められるような場面も少なくない。元来、宗教と医療はともに「今ここで悩み苦しみつづける人」に向き合い、手を差し延べる営みとして、深い関係をもって発展してきた。しかし、近代医学やその医療技術の発展とともに、医学ではもっぱらその自然科学的側面が強調され、専門家至上主義もあいまって、「病む人」ではなく「病気」だけを見るような医学・医療が、人間の生と死における宗教的な次元へのまなざしや宗教との関わりを排除してきたのも事実である。実際には、医療者との協働が必要とされる現場で宗教者が活動するには大きな壁があり、医学教育においては宗教は言うに及ばず人文学教育や教養教育すら役に立たないものとして軽視されている。本パネルは、「宗教と医療」という通常の問題設定ではなく、両者の間に「ヒューマニズム」という媒介項を設けることで、宗教と医療をめぐる今日の状況を多面的に把握するとともに、両者のあいだにある溝に橋を架けるための一歩として企画された。媒介となる「ヒューマニズム」という語には、人道主義、人間論、人間中心主義、あるいは人文学（ヒューマニティーズ）といった複数の意味を含ませており、そうした媒介を設けることで、宗教と医療双方の根源にある「今ここで悩み苦しみつづける人に関わる」という本質を再度確認するとともに、現在両者を隔てている溝や壁の実態についても照射することができるだろう。宗教と医療が交差する諸領域のなかで、今回は医学教育およびスピリチュアルケアの実践の二つに焦点を当てる。発表者のうち二人は大学医学部の教員であり、二人は医療現場においてスピリチュアルケアを行う宗教者である。

安藤泰至は、生物化学兵器開発と非道な人体実験で知られる731部隊に加わった罪の意識から、戦後医学研究の道を捨て、医学者として唯一その事実を告白した秋元寿恵夫の生涯をとりあげる。青年期には文学者を目指した秋元のヒューマニズムや人文学についての考察と彼の現代医学批判が、医学教育における人文学教育の意義について現代的な問題提起となっていることを解明する。

杉岡良彦は、医学教育において宗教がほとんど考慮されない現状の理由を考察する。しかし、スピリチュアルケアへのニーズなどは、医学教育の変革を迫る動きである。医学教育の現状を打開するためには、医学がどのような学問であるのかという医学概論的研究が重要であり、科学論と人間観双方の視点からの考察が必要である点を具体的に論じる。

柴田実は、病院におけるスピリチュアルケアの特徴について、キリスト教チャプレンの立場から論じる。医療者と比べてチャプレン（牧師）の働きは、専門性の違いにおいて忍耐と配慮を必要とし、それは大きく人間観に関わる。特に、医療の環境（組織、専門職、患者）との関わりにおいて、どのようにスピリチュアルケアが考えられているのかを考察する。

大河内大博は、全人的ケアの背景にある「人間らしく」を再考したうえで、「その人らしく」の有り様を支えるスピリチュアルケアの実践を、仏教の立場から論じる。「患者」としてではなく、一人の人間としての「その人らしく」という主体的な生をどう支え得るかを、チーム医療における宗教者の役割と共に考察する。

「患者学」を旗印に患者自身が主人公になれるような医療のあり方を探究しつつ、大本の信者として脳死臓器移植問題にも積極的に発言してきた医師・加藤眞三をコメンテータに迎え、実りのある議論が期待できる。

## 新発見大須文庫資料による日本中世禅宗史の転換

代表者：末木文美士

栄西と密教—新発見著作を中心として—  
 禅と密教・神道—聖一派の新発見資料から—  
 もう一つの禅宗—達磨宗の新発見資料—  
 禅と諸宗融合—新発見資料とその周辺—

米田真理子 (神戸学院大)

伊藤 聡 (茨城大)

和田有希子 (早大)

高柳さつき (中村元東方研究所)

コメンテータ・司会：末木文美士 (国際日文研)

死海文書・敦煌文書・ギルギット写本などの例を挙げ  
 るまでもなく、長い間埋もれていた原資料の発見・研究  
 は、歴史を大きく塗り替えるだけの衝撃を与える。日本  
 中世禅に関する大須文庫(真福寺)所蔵写本の発見もまた、  
 それらに類する大きな意味を持つものである。大須  
 観音として知られる真言宗智山派別格本山北野山真福寺  
 寶生院(名古屋市中区)は、かねてより中世の貴重な写  
 本を多数伝えていることで有名であり、その主要なもの  
 は『真福寺善本叢刊』第1期12冊、第2期13冊(臨川  
 書店)として出版されている。しかし、そこに収められ  
 ていない貴重な写本がなお多数残されている。その中で、  
 禅に関係するものの調査が十数年にわたって続けられて  
 きたが、ようやく多少の見通しが付くようになり、『中世  
 禅籍叢刊』全10巻(臨川書店)に収められて刊行が始ま  
 っている。本パネルは、この新発見資料によって、従来  
 の禅宗史がどのように書き換えられるかを、主要な新出  
 資料に基づいて検討したい。

米田真理子は、栄西に関する新発見資料の意義を論ず  
 る。栄西は中国から臨済禅を請来したと言われるが、今  
 回発見された著作はいずれも密教に関するものである。  
 とりわけ断簡から復元された『改偏教主決』は、原山の  
 僧尊賀との間で交わされた密教教主論に関する論争書で  
 あり、当時の仏教界の情勢を知る貴重な資料である。他  
 に、『無名集』『隠語集』などの著作も発見されている。  
 本発表では、これらの密教関係の著作を検討し、栄西に  
 とっての密教の意味を明らかにする。

伊藤聡は、円爾(東福寺開山)に由来する聖一派の禅  
 と密教・神道との関係を論ずる。円爾の弟子癡元大慧は、  
 安養寺(三重県多気郡)の開山として知られるが、その  
 流れは禅よりも密教の安養寺流として真福寺に流入して  
 いる。新発見資料も多くは密教のもので、円爾や癡元の  
 講義録もあり、生の資料として貴重である。それらにお  
 いては、密教の中に禅が含み込まれ、また、そこから神

道が発展してくる源泉ともなっている。これらの複合的  
 な実態を検討する。

和田有希子は、達磨宗に関する問題を論ずる。達磨宗  
 は、栄西の禅請来に先立ち、大日能忍が無師独悟によっ  
 て唱えたとされ、極端な修行無用論を主張したとして、  
 さまざまな批判に曝された。達磨宗に関する資料は従来  
 金沢文庫のものなどが知られていたが、今回、大須文庫  
 の断簡から『禅家説』という著作が復元され、達磨宗と  
 関係があると推測されている。そこには、従来の達磨宗  
 の常識と異なり、懇切な坐禅の方法などが説かれている。  
 そこから達磨宗とは何なのか、改めて検討する。

高柳さつきは、これらの新出の諸資料に対して、従来  
 知られていた文献との関係を論ずる。特に癡元大慧の場  
 合を中心的に取り上げる。伊藤の発表のように、大須文  
 庫写本では、癡元は密教を中心としているように見える  
 が、他の著作『十牛訣』などを見ると、禅を中心として  
 諸宗を位置付けている。円爾の『十宗要道記』のように、  
 聖一派では、諸宗を教判的に検討して、禅を最高に位置  
 づけるが、そのような禅宗の位置づけと密教とはどう関  
 係するのか、検討する。

以上のように、これらの新発見資料は、従来の「純粹  
 禅」中心主義と異なり、きわめて多面的、融合的で、特  
 に密教との密接な関係を示している。これは、けっして  
 「純粹禅」に至る以前の不純な「兼修禅」というのでは  
 なく、その融合に積極的な意義を見出しているように見  
 える。本パネルでは、これらの資料の検討を通して、従  
 来の「純粹禅」対「兼修禅」のような単純な見方では割  
 り切れない日本中世禅の実態の解明を進めることを目指  
 す。

## 東アジア仏教と『法華経』

中国における『法華経』の思想の受容  
 吉蔵の法華経観  
 韓国における『法華経』研究史  
 日本仏教における『法華経』の思想

代表者：菅野 博史  
 菅野 博史 (創価大)  
 奥野 光賢 (駒大)  
 金 炳坤 (身延山大)  
 養輪 顕量 (東大)  
 コメンテータ：斎藤 明 (東大)  
 司会：菅野 博史 (創価大)

## [企画の要約と意義]

『法華経』は、紀元前一世紀から紀元後二世紀にかけて、インドで成立した初期大乘経典の一つである。中国には、三世紀に伝わり、竺法護によって『正法華経』として漢訳された。その後、鳩摩羅什によって『妙法蓮華経』として漢訳され、信仰と研究の対象として大いに流行した。東アジアにおいて多くの信仰を集めた観世音菩薩ももとは『法華経』の観世音菩薩普門品に説かれたものである。

『法華経』の思想のなかでは、とくに一仏乗の思想が中国仏教の世界に広く受け入れられ、大きな影響を与えたといえるであろう。

また、『法華経』は中国においてのみではなく、仏教が韓国、日本に伝わった後は、それぞれの地で独自に解釈され、またそれぞれの地の文化に大きな影響を与えた。

さらに、過去の歴史において大きな役割を果たしたばかりではなく、現代においても、『法華経』は生きた信仰の拠り所として、天台宗、日蓮宗各派、法華系新宗教に所属する大勢の人々の信仰を集めていることも確かな事実である。

このような『法華経』について、中国仏教、韓国仏教、日本仏教の専門家を集め、その思想の魅力、歴史的な役割を十分に論じてもらい、東アジア仏教の世界における『法華経』の地位を明らかにしたい。中国仏教については、二つの発表を用意したので、一人(菅野)は総論的な話をして、もう一人(奥野)は個別的に三論宗の吉蔵の法華経観を取りあげる。

## [個々の発表内容]

(1) 菅野博史「中国における『法華経』の思想の受容」は、道生、法雲、智顛、吉蔵、基の諸注釈書を通じて、『法華経』の三つの中心思想、つまり、一仏乗の思想(すべての衆生がみな成仏することができること)、久遠の釈尊の思想(釈尊はインドではじめて成仏したのではなく、はるか遠い過去に成仏したこと、未来も長遠な寿命を盛

っていること)、地涌の菩薩の思想(釈尊の入滅後に、釈尊の久遠の弟子である地涌の菩薩が『法華経』の担い手となること)が中国においてどのように受容されたかを全体的に考察するとともに、民間における『法華経』の受容として観世音菩薩や『法華経』信仰の応驗記や疑経についても言及したい。

(2) 奥野光賢「吉蔵の法華経観」は、鳩摩羅什訳中観系論書によって三論宗(三論学派)を大成した嘉祥大師吉蔵(549-623)の法華経観を考察する。吉蔵は三論宗の学僧として著名であるが、その生涯を通じて『法華経』研究に心血を注いだことでも知られている。近時、吉蔵の『法華経』研究は天台大師智顛(538-597)や慈恩大師基(632-682)、さらには新羅の元暉(617-686)にも影響を与えていることが指摘されているので、そうした点にも言及することとしたい。

(3) 金炳坤「韓国における『法華経』研究史」は、四世紀末の仏教伝来以来現在に至るまでの、朝鮮半島(海東)における『法華経』研究の歴史を辿り、その全体像を明らかにする。1) 三国時代から朝鮮時代までは、本経との関連性を有する人師を総括。さらには現存する、または逸文が存する「海東撰述法華章疏」を概観し、それらの東アジア仏教史における位置づけを明確にする。2) 二十世紀以降は、本経をテーマとする「韓国国内での研究成果」を紹介し、研究分野の把握・研究傾向の分析に努め、韓国における本経研究の実態について総合的に論及する。

(4) 養輪顕量「日本仏教における『法華経』の思想」は、日本の古代、中世、近世、近代を通じて、『法華経』がどのように受容されたのかを明らかにする。とくに古代の講説と持経者、中世の身読、近世の禅観との関わりから、近代の社会運動の中で思想的に大きな役割を果たし、万民の平等性の根拠となったことなどについて言及するつもりである。

## 東洋の宗教思想と井筒俊彦の哲学的思惟

代表者：鎌田 繁

西洋における metapsychisches Wesen の探究と記憶術

河東 仁 (立教大)

井筒俊彦と道家思想—郭店楚簡『老子』『太一生水』から考える—

池澤 優 (東大)

井筒俊彦における禅解釈とその枠組み

金子 奈央 (中村元東方研究所)

井筒俊彦の仏教思想理解の特質

下田 正弘 (東大)

司会：鎌田 繁 (東大)

イスラーム研究の先駆者と知られる井筒俊彦(1914-1993)は、若いころから世界の伝統的思想に関心をもち続け、晩年には「東洋」の宗教的諸伝統の個々の哲学的営為の構造論的特質の探求に基づいて、「東洋哲学」と名付けた独自の意味論的哲学を構想するに至った。宗教研究にあっても狭い領域に籠るような研究が多いなか、井筒のようにひとつに焦点を結びながら極めて幅の広い領域を覆う研究は稀であり、彼の思索を正しく評価することは現在において極めて重要であるといえるだろう。井筒の思索の土台となったテキストを読み直し、井筒の読みの意義や問題点を明らかにすることは、彼の思索の根幹を明らかにすることであり、井筒の思想史的位置づけや、彼の思索を継ぎ発展的に将来につなぐ方向性を考える上で、大きな意義をもつ。このパネルでは仏教(起信論・禅)、道家思想、それに中世ヨーロッパの思想から井筒の思索を考察する。

河東 仁

中世ヨーロッパにおいて、修道士や神学者のあいだで、聖書など多くの書物を記憶するための術が盛行していた。さまざまなイメージ(心像)とアイデア(概念)とを連結、連鎖させることによって、膨大なテキストを自らのうちに繋ぎ止めていく記憶法である。本発表では、このテーマをめぐる精力的な研究を展開している桑木野幸司らに依拠しつつ、井筒が『神秘哲学』(哲學修道院、1949年、24頁)において提唱した metaphy- sisches Wesen, metapsychisches Wesen なる分類法の有意性を考察する。端的に言えば、後者の、「窮極的實在を、内向的自己沈潜の途によつて、『靈魂の彼岸に』證得」する系列に属するものとして、それも西洋の一事例として、この記憶術を捉える。

池澤 優

中国戦国時代の道家思想は、井筒がその著作の中でも頻繁に言及する題材であり、その中では『老子』の「道」は深層的な無分節を表すものとして理解されている。そ

の理解は大局的には正しいが、最近の出土資料の増加によって『老子』は幾つかの異なる由来から構成されることが知られるようになっていく。本発表では郭店楚簡の『老子』丙篇と『太一生水』を用いて、「道」には無分節な存在という側面と存在に内在する法則性という側面の両面があることを明らかにした上で、この「道」の二面性が井筒の思想に照らした場合、如何なる意味を持つのかを考える。

金子奈央

井筒の「東洋哲学」は、所謂「西洋哲学」との止揚において「新しい哲学を世界的コンテクストにおいて生み出していく」[『意識と本質』岩波書店、1991:409,412]という構想を背景に持つ。井筒の考察の対象の一つに禅がある。彼は幼少期より禅と関わりを持っていた。また、彼は1967年よりエラノス会議で講義を行ったが、鈴木大拙を継いで禅を講じることを期待された関係から、『意識と本質』以前にも禅を論じている。本発表では、井筒の禅に関する論考を取り上げ、彼の思想世界におけるその禅解釈の意義を探るとともに、井筒の禅解釈が、近代以降の日本の仏教観・禅観との関わりにおいて、いかなる位置づけを持つのかを考察する。

下田正弘

井筒は、晩年に東西思想の比較研究を推し進め、至り着いた独自の仮説である、共時論的構造論の代表事例として仏教思想を位置づけた。最晩年の『意識の形而上学』に示される『大乘起信論』理解には、意識と存在の問題を、言語を場として照らし出す、井筒独自の仏教解釈の真骨頂が現れている。井筒のこうした仏教思想理解は、インド哲学者の中村元や、仏教学者の平川彰とは大きく異なった痕跡を今日に残し、加えてイスラーム研究、聖典研究全般に輝かしい仕事をなした Wilfred Cantwell Smith に比しても特異である。本発表では、井筒俊彦の仏教思想理解の特色を取り上げ、同時代の研究者たちの理解と照合しつつ、その思想史における意義を考える。

## 新宗教論の再検討—後期近代社会における展開を踏まえて—

代表者：大西 克明

教団ガバナンスの変遷と変容—信者の高齢化の観点から— 大西 克明 (東洋大)  
教団ライフサイクル・コース論の検討—教団再生産の観点から— 猪瀬 優理 (龍大)  
新宗教の教導システムの比較研究—後期近代社会を視野に— 寺田 喜朗 (大正大)  
運動の発生と展開の現在—〈新新宗教〉論の再検討を通じて— 塚田 穂高 (國學院大)

コメンテータ：弓山 達也 (大正大)

司会：大西 克明 (東洋大)

『新宗教事典』(1990年)の公刊から四半世紀が経過する。その後の新宗教研究はどのように展開してきたのであろうか。その整理や総括が十分になされてきたとはいえない。1990年代以降、非制度的な宗教現象—スピリチュアルな諸文化—に関心が集まったが、教団ごとに差があるものの、新宗教は着実に活動を続けている。また、我が国では、創価学会や立正佼成会、天理教等に匹敵する宗教運動はその後、現れていないことを客観的な事実として指摘することができる。高度経済成長期に急成長を遂げた新宗教教団や、いわゆる新新宗教は、現在どのような壁に直面しているのか。また、後期近代社会にどのような対応をみせ、いかなるドメイン戦略に基づき、運動を再生産しようとしているのであろうか。

新宗教研究の再活性化のためにも、ポスト『新宗教事典』における研究実践の統括、及び、これからの新宗教研究において問われるべき課題を検討することは、重要だと考えられる。

本パネルでは、新宗教研究を積極的に進めているそれぞれの研究者に、各分野の研究実践の総括と、今後、探究されるべき課題について論及してもらい、新宗教研究の視角や方法について、議論を深めていきたいと考えている。

第一報告では、信者が高齢化することによる、教団ガバナンス(統治)の変容について論じてもらう。新宗教が展開・進展することと、信者の高齢化現象が発生する。教団内において相対的に増加する高齢信者への対応は、教団ガバナンスの変容をもたらす可能性があるだろう。『新宗教事典』以降の研究動向を踏まえながら、それらの教団ガバナンスを比較検討することで、新宗教研究に関する新たな課題や、今後の展望について論じてもらう。

第二報告では、『新宗教事典』以降の論点としてあげら

れる「教団ライフサイクル・コース論」について検討してもらおう。「教団ライフサイクル・コース論」とは、どのような枠組であるのか。その可能性や有効性についてはどのように論じられてきたのか。これまでの議論の整理・検討を行ってもらい、教団再生産の観点から、今後の課題について迫ってもらおう。

第三報告では、「教導システム」の観点から、新宗教研究の再検討を行なう。新宗教研究の視座の一つである「教導システム」論はいかなる枠組みで、またどのような可能性と有効性を持ち得ているのか。それらは、これまで十分に議論がされてきたとはいえない。後期近代社会を視野に置き、教導システムの比較研究をしてもらいながら、今後、探究されるべき課題について論じてもらう。

第四報告では、「新新宗教」論の再検討を通じて、新宗教論それ自体の検証を行ってもらおう。1979~80年代前半に注目を浴びた、いわゆる新新宗教は、それから30年後、いかなる変貌を遂げたのであろうか。それらの運動の発生基盤や、現在における展開について、後期近代社会を念頭に置きつつ論じてもらい、新宗教概念への議論を展開してもらおう。

以上四件の報告を踏まえ、ポスト『新宗教事典』における研究実践への総括的議論を展開しながら、新宗教研究の視角と方法について吟味していく。パネルでの各報告を受けて、コメンテータからコメントしてもらおう。それに対して各報告者が回答し、さらにフロアからの意見も受けながら、全体の議論を深めていきたい。そうすることで、新宗教研究における課題と展望についての新たな知見と、今後の研究実践の方向性が明確になってくると思われる。

## 高楠順次郎とその時代—新出資料の紹介を中心に—

高楠順次郎の同時代的評価

高楠順次郎と伊東忠太

高楠順次郎の伝道活動—教育・メディア—

高楠日記を読み解く—高楠順次郎と本願寺との関係について—

代表者：石上 和敬

春近 敬 (武蔵野大)

河津 優司 (武蔵野大)

岩田 真美 (龍大)

石上 和敬 (武蔵野大)

コメンテータ：大谷 栄一 (佛教大)

司会：石上 和敬 (武蔵野大)

欧州留学の経験を踏まえ、日本のアカデミズムに本格的な欧米由来の仏教文献学が根付く礎を築いた高楠順次郎の功績は、近代仏教を歴史的に検証する上で重要であるだけでなく、今日につながる仏教学の流れや、さらには近現代の仏教を取り巻く諸事象を読み解く上でも無視することはできないものとなっている。しかしながら、高楠は仏教学者、教育者としての側面だけではなく、社会的にも相応の影響を持ち、広範な活動を展開した人物であったことから、その全貌を視野に入れた総合的なアプローチはなかなか研究対象とはなりにくい側面があったことも否めない。

本パネル代表者の石上が所属する武蔵野大学は1924年に高楠が創設した大学であり、高楠関係の史資料を数多く収蔵しており、これまでも、1979年に『雪頂 高楠順次郎の研究』を公刊し、また、2008年には『高楠順次郎全集』全10巻を完結させるなど、高楠研究に一定程度の貢献を成してきた。これらの研究の蓄積を踏まえつつ、数年前から、武蔵野大学の仏教文化研究所の研究室が中心となり、高楠の実像に多面的に迫る共同研究プロジェクトをスタートさせた(仮称：武蔵野大学高楠研究会)。

同研究会では、これまでの高楠研究の果実を確認するとともに、近年、目覚ましい発展を遂げている近代仏教研究の諸成果をも参照しつつ、高楠の思想や活動に新たな光を当て直す様々な取り組みにチャレンジしている。同研究会の特徴の一つは、上述の通り高楠の活動範囲や人脈が多岐に亘っているため、専門分野を異にする多くの研究者が参画していることでもある。本パネルは、その研究成果の一部の中間報告として企図されたものである。コメンテータには、日本の近代仏教史研究を牽引する一人である大谷栄一氏を迎える。

各発表者の報告概要は、以下の通りである。

春近敬：これまでの高楠をめぐる評価は、ともすれば当時の教え子の世代によって懐旧的に語られがちであっ

た。本発表ではこの傾向を踏まえて、高楠の存命中の浄土真宗関係者による著作や雑誌記事を手掛かりに、同時代における評価の解明を試みる。また、高楠が大谷派・高田派など他派の真宗の仏教者といかなる関係を結んでいたかについても着目し、彼の思想や活動の評価とそれらをもたらした影響を考察する。

河津優司：高楠は、仏教精神を身につけた婦人を育成する学校として、1924年、東京築地本願寺内に武蔵野女子学院を設立した。1927年、高等女学校として認可され、1929年、築地より西東京市の現在地へと移転するが、その経緯のなかで描かれたものと思われる、1927年の年記の入った青図「武蔵野女子大學建築設計圖」が遺されている。そこには「顧問工學博士伊東忠太 設計者建築家菅原栄蔵」と記名されている。本発表は、高楠がどのような経緯で建築界の巨魁と呼ばれた伊東忠太と関連を持ち、伊東忠太が本設計図を描くに至ったかを探るものである。

岩田真美：高楠の伝道活動について、教育とメディアという側面から考察を進める。高楠は学生時代に、真宗本願寺派の僧俗共学の普通教校において「反省会」を組織し、機関誌『反省会雑誌』(『中央公論』の前身)を発行していた。その後も、『ヤング・イースト』、『現代仏教』、『アカツキ』など多くの仏教雑誌の創刊に関わっている。また中央商業学校、武蔵野女子学院などの学校を創設し、教育や雑誌メディアを通して国内外に仏教思想を普及させようとした。高楠が目指した仏教精神の普及を、ここでは学校創設と出版活動という視点から再検討する。

石上和敬：武蔵野大学には大正9年から昭和15年間の13年分(複数の欠年あり)の高楠の日記が遺されているが、本発表では、高楠日記から浮かび上がる高楠と西本願寺との関係に焦点を当てることにする。高楠が西本願寺と深い関係にあったことは周知の事実であるが、両者の関係の実際について、高楠日記の記述を検証しながら確認してみたい。

## 東と西における神—靈魂論と最高存在論—

代表者：安藤 礼二  
 安藤 礼二 (多摩美術大)  
 斎藤 英喜 (佛教大)  
 江川 純一 (東大)  
 木村 武史 (筑波大)  
 司会：安藤 礼二 (多摩美術大)

折口信夫の靈魂論  
 折口信夫における中世・大嘗祭・花祭  
 ペッタッツオーニの最高存在論  
 エリアーデの宗教学と文学における靈魂観と最高存在者

19世紀後半にヨーロッパに生まれた宗教学と、20世紀初頭に日本に生まれた民俗学は、当然のことながら多くの主題と方法を共有している。世界が一元化された時代に、それぞれの地域に限定された宗教の固有性ではなく、地域の限定を乗り越えた、宗教の持つある種の普遍性が探究されることになった。宗教学者ミルチャ・エリアーデはその対象を「アルカイック」と称し、民俗学者折口信夫は「古代」と称したが、ともに原初的にして原型的な宗教(換言すれば「神」)が探られている点で相違はない。

エリアーデも折口も、西洋と東洋における、あるいは西洋と東洋という分割を無化してしまう原初の「神」の姿を追い求めていった。その過程で両者は複雑な共振現象、共鳴現象を引き起こすことになった。エリアーデが「ヒエロファニー」を説明する際に繰り返し参照する日本の事例は、岡正雄を経由してヨーロッパに伝えられた折口のマレビット論に他ならない。また、エリアーデと折口の双方が主張する、アルカイックな宗教の核に存在する「至上神」というヴィジョンは、ともにイタリアの宗教史学者ラッファエーレ・ペッタッツオーニが提唱した最高存在にその源泉がある。さらにペッタッツオーニは、そもそも最高存在を日本研究、特に『古事記』研究から導き出している。

影響は一方的なものではなく双方向的であり、かつ重層的なものである。折口は、ヨーロッパに生まれた宗教理論、アニミズム、マナイズム、最高存在論を次々と消化吸収していった上で、原初の神とは「たま」(靈魂)であるとし、『古事記』の冒頭に出現する「産霊」の神をその原型として抽出した。靈魂論と最高存在論を一つに結び合わせているのである。東西における原初の神の探究は、靈魂論と最高存在論を二つの極として展開されていった。

本パネルでは、折口、ペッタッツオーニ、エリアーデの学が持つ近代的な起源とその限界を画定した上で、そこにさらなる展望をひらいてみたい。なぜなら、彼らが直面したのは、近代に生まれた宗教学と民俗学が持たざ

るを得なかった可能性であり不可能性であったはずだからだ。

安藤は、全体の問題提起を行う。原初の神とは「たま」(靈魂)であると主張した折口信夫の古代学が成立するにあたって、ヨーロッパの宗教学、さらには関係諸学とどのような共振および共鳴関係を持っていたのかを明らかにする。折口の学は、靈魂論と最高存在論の交点で、近代的な解釈学として可能になった。その解釈学によって見出された列島の古代宗教=古代文学の構造を提示してみたい。

斎藤は、「中世神話」研究の成果から折口信夫の学の特異性を浮き彫りにする。折口の「古代研究」は、じつは中世日本で作り出された根源神を求めて、神人合一をめざす神秘思想、儀礼と深い関わりをもっている。「大嘗祭」という王権祭祀と「花祭」という民間神楽の世界を架橋させる折口の「宗教知」の世界を探索する。

江川は、イタリアの宗教史学者ラッファエーレ・ペッタッツオーニの日本宗教研究を取り上げ、最高存在論と日本の宗教の関わりを明らかにする。ペッタッツオーニは、日本の事例の検討から宗教史学をスタートさせ、エリアーデの天空神理解、さらには、折口信夫の「既存者」概念に大きな示唆を与えた。東西における原初の神観念の問題について考察する際、ペッタッツオーニの宗教史学は不可欠である。

木村は、エリアーデの宗教学と文学作品(特に『若さのない若者』)に見られる「始源」の探求と憧憬について取り上げ、靈魂論と最高存在論との関わりを論ずる。範型としての世界創世神話における最高神と暇な神、宗教の歴史的起源と歴史的展開、文学作品に見られる言語の起源の探求とその挫折・靈魂の再生を取り上げる。また、ヒエロファニーの説明で取り上げる石や樹木の事例が日本宗教と共振する点についても考察を行う。

## アジアにおける聖者信仰の諸相

代表者：井田 克征

政治利用される聖者—満州における活仏転生工作—

高本 康子 (北大)

インドにおける聖者信仰の形成とチベットへの教誡の伝達

菊谷 竜太 (東北大)

聖者が生まれるとき—大衆ヒンドゥー教のサント崇拜—

井田 克征 (金沢大)

イスラームにおける聖者—イブン・アラビーの完全人間論から—

澤井 真 (日本学術振興会)

司会：井田 克征 (金沢大)

聖者、つまり地上の人間がある種の宗教的なカリスマを身に帯びた者とされる現象は、洋の東西や宗教を問わずしばしば見出される、普遍的な現象とも考えられる。しかしながら宗教や聖性といった概念と同様、この聖者という概念もまた極めて曖昧で、定義し難いものである。異なった歴史的／社会的コンテクストのもとで、それぞれの「聖者」は大きく異なった意味や機能を担っている。ともすれば我々はヨーロッパ的な聖者観にもとづいて、聖性を示現し、民衆を救済するような存在こそを聖者ととらえがちであるが、それは極めて偏ったものの見方と言わざるを得ない。本企画では、特に非ヨーロッパ圏における「聖者」の諸相を参照することで、そうしたヨーロッパ中心的な聖者観を相対化し、新しい聖者概念を構想することを目指している。議論を先取りして言えば、現在の我々が考える「聖者」とは、極めて近代的な宗教観／人間観にもとづく概念であり、多様なアジアの宗教伝統を見れば、それとまったく異なる聖者たちが存在してきたことは明白である。

本企画は、アジア地域における仏教・ヒンドゥー教・イスラーム教をそれぞれ専門とする研究者達による、以下の四つの報告から構成されている。

まず最初の高本報告は、第二次世界大戦中の満州国および蒙古連合自治政府の管轄区域内において日本人によって行われたチベット仏教に関わる工作活動を主題としている。主に対ソ連戦の準備、もしくは現地のモンゴル系住民に対する行政の一環として実地されたそうした活動の一つとして、高本が扱うのは、チベット仏教の高位ラマの転生を「支援」することで、そのラマが持つ宗教的権威の活用を目指した「活仏転生工作」である。

この転生ラマという主題は、次の菊谷報告にも見出される。菊谷は、中世にインドのベンガル地方などを中心にチャルヤーバダと呼ばれる宗教歌を作って活動したシッダ(成就者)たちが、後にチベット仏教文化圏におい

てトゥルク(転生者)としての役割を与えられるに至ったことに注目する。報告では、ターラーナータ(1575-1634)とその転生者を軸として、中世インドにおいて生じた聖者(シッダ)信仰が、チベットからさらには現代のモンゴルにまで展開していく過程を明らかにする。

次の井田報告では、ヒンドゥー教における聖者観の変容が主題となる。井田はインド西部のマハーラーシュトラ州において現在も隆盛を誇るワールカリー派の宗教詩人(サント)崇拝の系譜を辿り、そうした中世のサント達が、近代化の波を受ける中で合理化され、近代的な宗教倫理を具現化する「聖者」として、この地域の近代化や、対英独立運動を牽引するアイコンへと祀り上げられていく様子を明らかにする。

最後の澤井報告は、イスラーム神秘主義において存在一性論の主唱者として名高いイブン・アラビーの聖者論を取り扱う。アラビア語の「ワリー」という語は、神の近くにある者という意味をはらんでいることから「聖者」と翻訳される。預言者ムハンマドや彼の教友ばかりでなく、スーフィーら神秘家もまた神に近づくことができる者としてワリーとみなされている。聖者が預言者の後継者となり、神と接点を保ちながら世界を維持すると考えるイブン・アラビーの思想を糸口として、イスラーム的な聖者性について考察する。

2015年7月6日発行

編集・発行 日本宗教学会 第74回学術大会 実行委員会

〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236 創価大学文学部

E-mail: jars74th@gmail.com

HP: [http://jpars.org/annual\\_conference/](http://jpars.org/annual_conference/)